

淡水魚の分布変化と

人間活動のかかわり

琵琶湖博物館 学芸員 宮本 真一

空白の時間

これまで日本列島における淡水魚の分布変化に関して、人為的な影響を考慮した実証的な研究の蓄積は少なかった。つまり、いつから淡水魚はここに生息しているのか、ということとは意外わかっていない。

しかし、ナマズ属は先史時代以降の平野の発達や、人間活動の活発化によって分布域を拡大させてきたことが近年の遺跡から検出される動物遺存体や民俗学の記録の検討から明らかとなっている（宮本ほか、2001）。

そこで、日本列島における主要淡水魚であるコイ属およびフナ属を対象に、先史時代以降の分布変化について、動物遺存体や、民俗記録などから検討を行った。

淡水魚分布の東西

これまで先史時代以降の日本列島の淡水魚の分布の変遷について、生物地理学の立場から下記の指摘がなされてきた。

日本列島の淡水魚の種数は



写真1 遺跡からは遺跡情報だけでなくさまざまな発見がある(守山市、浮気南遺跡)

西日本に多いこと。そして、この分布パターンからは、淡水魚の南方からの北上が考えられ、その境界は糸魚川静岡構造線にあることである。さらには、東日本への分布の拡大は、沖積平野の発達や、水田の分布域の拡大が想定されることである。

しかし、この淡水魚の分布の東日本への拡大について、水田の分布域拡大や近世の本草書などの記録から人為との関連性が上記のように想定されてきたが、化石資料などを用いて実証的に論じられたことは少なかった。

淡水魚の自然分布と人為

そこで、この淡水魚の『漠然とした人為的東進説』を検証するため、ナマズ属と近縁のギギ類を対象として遺跡（写真1）から検出される遺存体の検索や、江戸時代の博物学書の検討、さらには民俗学による近世末〜近代初頭の記録をもとに、実証的検証を行った（宮本ほか2001、宮本・渡邊2001、宮本2003）。



その結果、先史・古代、中世においてのナマズの分布の中心は、糸魚川 静岡構造線以西の西日本で、約2万年前以降の沖積平野の発達によって形成された沼沢地に生息していたこと。そして、近世にはいつて（江戸時代中期）関東に移殖され、さらには、東北や北海道への分布の拡大は、近世末から近代初頭であつたことを指摘した。

つまり、動物地理学的に淡水魚の東日本地域への拡大の障害となつてきた糸魚川 静岡構造線を越えてナマズが東日本に分布を拡大させたのは、江戸時代の中期以降に人為によつてもたらされたことを明らかにしたのである（図1）。この人為によつてもたらさ

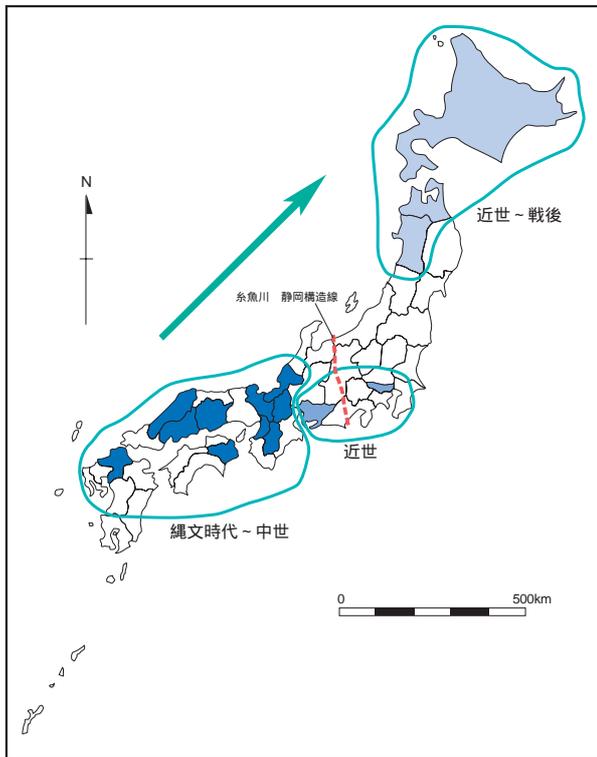


図1 ナマズ属の北上（宮本ほか、2001に加筆）

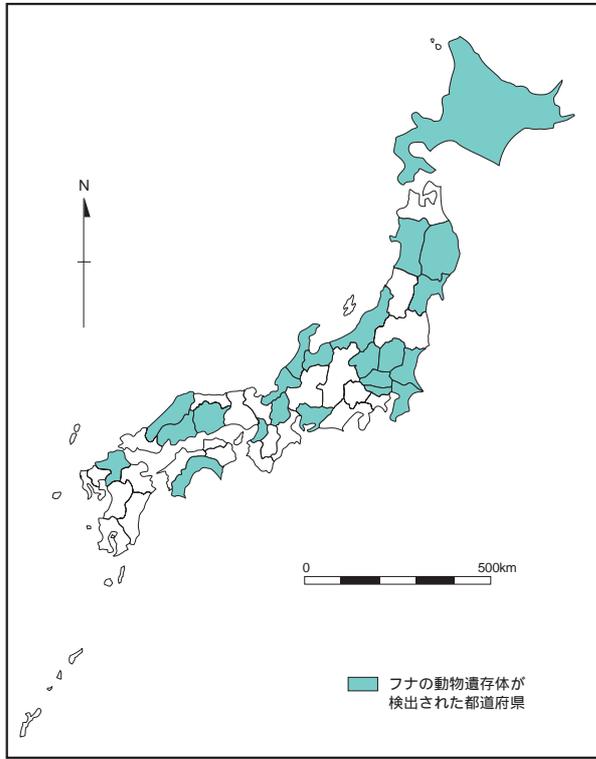


図3 遺跡から検出されたフナ属の遺存体の分布(宮本・中島、2006)

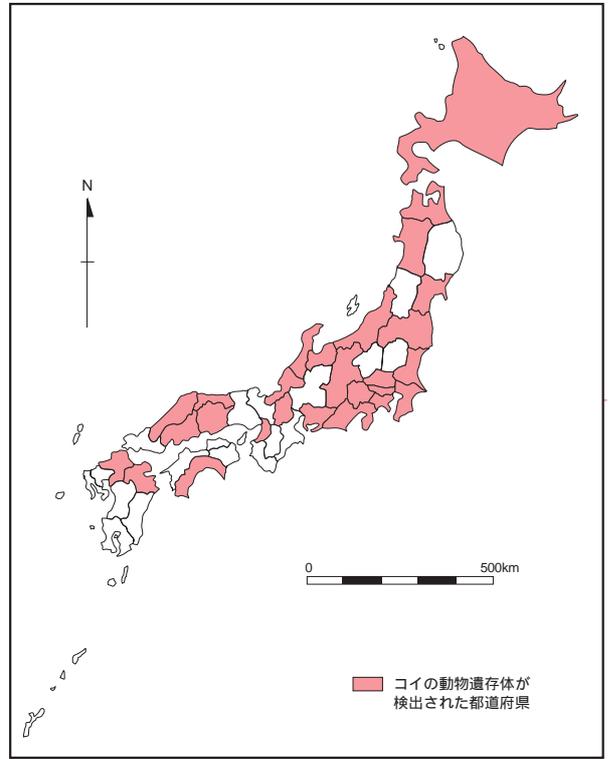


図2 遺跡から検出されたコイ属の遺存体の分布(宮本・中島、2006)

れた淡水魚の分布域の拡大は、淡水魚のなかでもっとも有用魚種とされたコイ・フナ類にも容易に想定される。たとえば、北海道のコイとギンフナについては人為的な搬入の可能性を完全に否定することはむずかしいとされているのだ。

研究の方法

全国で公表されている遺跡発掘調査報告書を可能な限り調査し、当該項目の動物遺存体を検索し、項目ごとに整理した。つづいて、江戸時代の本草書類、と柳田国男の著作から淡水魚に関する箇所をそれぞれ検索した。

淡水魚と人の関係

今回の検索から検出された魚類遺体は、東北や北海道においても先史・古代のコイ・フナ類がみられ、水田農耕の北上とともに分布域を拡大させた可能性は低いと言えよう(図2、3)。

ただし、民俗学者である柳田国男が近代初頭において、近世末の状況を記録したものによれば、「何にしても僅かな年代に、

我力でも無しによく分布したものである。羽後の湯澤邊では高い峠を越えて一ノ関方面から毎年金魚の子が入って来る。其代に此方面から太平洋岸に向つて、鯉の子が澤山に行くといふのである。」「鯉は食へるから田舎の人も、昔から之を運んで居たのかも知

れぬ。併し秋田領では、鯉も金魚のやうに新参で、文化頃(一八〇四〜一八一七年)から多くなつて来た土地の人も言ひ、享和の末年(一八〇三)に、命じて之を放つと、記録にもあるそつである。」

とあり、遺跡からの魚類遺体とは一見矛盾する。

しかし、明治末年頃から一般淡水魚類の移殖が勃興すると共に更に一般の飛躍を遂げたものであると指摘されているように、近代初頭における養殖のための放流によって、個体数が増加し、上記の柳田の記録にあるように、人々が個体数の増加を認識するようになったのではないだろうか？

有用魚としてのコイ・フナ属

江戸時代の本草書コイは琵琶湖や淀川水系、諏訪湖はもとより隅田川の名産ともなっていたことが記されており、すでに関東平野に分布していたものと考えられる。また、フナは琵琶湖や淀川水系、諏訪湖はもとより、長崎地方においても大きなフナの捕獲が記録されている。しかし、関東平野さらには、九州においても捕獲や薬効の記載があり、すくなくとも、近世の段階における関東平野以西において、コイ・

フナは淡水魚の地域的な種数や個体数に関係なく代表的な魚種として一般化していたものと考えられる。

人と関わって形成された自然

ナマズ類は近世以降人為によって東日本に分布域を拡大させたが、コイ・フナ類はそれ以前から遠隔島嶼をのぞく列島の広範囲に分布し、人間の活動に関わって分布や種数の拡大させたのは近代初頭以降に本格化したものと考えられた。

いまでもなく、現在の移入種問題に代表されるように、人と関わって形成された自然の研究は、その形成過程の解明や、今後の変化を議論するうえで、現代の自然の評価にかかわってくる課題だと思つた。

その結果、「日本列島の歴史性」をふまえた感情論ではない発展的な環境論が展開可能となるのだらう。

参考

- 宮本真一・渡邊奈保子・牧野厚史・前畑政善(2000)「日本列島の動物遺存体記録にみる縄文時代以降のナマズの分布変遷」動物考古学、16
- 宮本真一・渡邊奈保子(2001)「動物遺存体資料にみる縄文時代以降のナマズの分布の変化」東日本にナマズはいなかったか?。宮本真一(編著)『琵琶湖博物館5周年記念企画展、第九回企画展(絵なます)』魚がむすぶ琵琶湖と田んぼ(展示解説書)滋賀県立琵琶湖博物館
- 宮本真一(2003)「ナマズの東進と人間活動」遺跡の魚類遺体から。滋賀県立琵琶湖博物館(編)『絵なます』魚と文化の多様性。サンライズ出版
- 宮本真一・中島経夫(2006)「縄文時代以降における日本列島の主要淡水魚の分布変化と人間活動」動物考古学、23